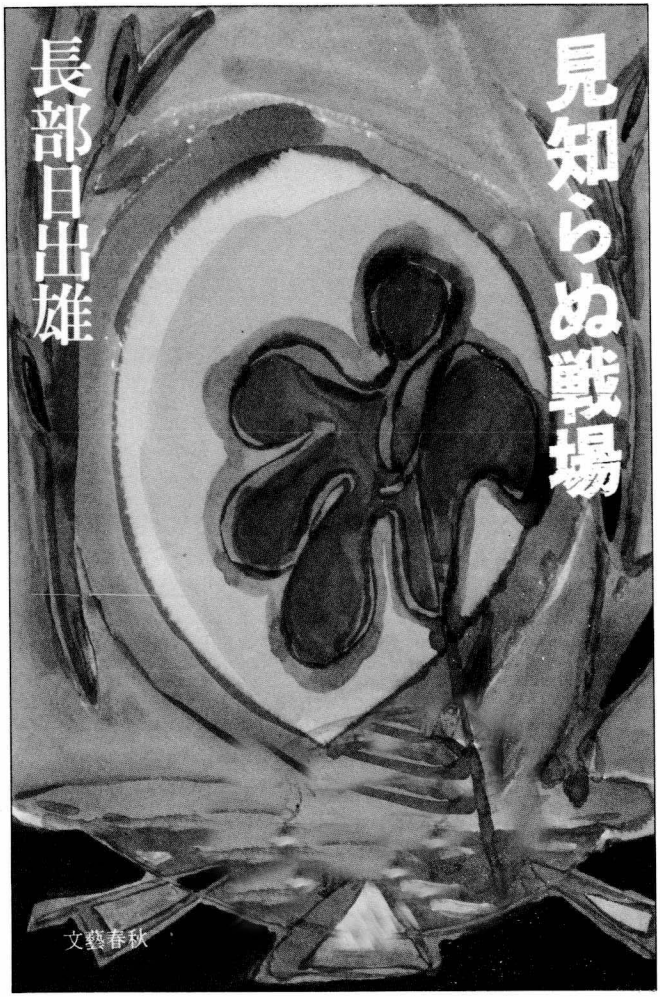
見知らぬ戦場

長部日出雄

文藝春秋

見知らぬ戦場

長部日出雄



文藝春秋

© Hideo Osabe 1986
Printed in Japan

見知らぬ戦場
一九八六年八月十五日第一刷

定価　一二〇〇円

著者　長部日出雄（おさべひでお）

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

印刷　精興社
製本　矢嶋製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします

ISBN4-16-309160-2

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　首狩り族の土地　7
第二章　光る鷹の眼　97
第三章　もうひとつの戦場　168
あとがき　247

装画　日下和夫
装幀　坂田政則

見知らぬ戦場

第一章　首狩り族の土地

一

長屋を区切ったかたちに民芸品店と並んでいる小さなレストランを、一軒ずつ外からのぞいて、おなじバスで来た二人の若い白人の女性の姿が、奥に見えた店に入った。

簡単なテーブルと椅子が置かれた薄暗い土間を通って行くと、奥にバルコニー風の部屋があり、高台に建っているので、すこぶる見晴らしがよく、風通しがいい。

若い白人の女性は、手すりに接したテーブルにすわり、一人の前にはビール、もう一人の前には、清涼飲料の瓶が置かれていた。

空いた卓を間にひとつ挟んで、景色と彼女たちが同時に見える場所にすわった岡村は、注文を聞きにきた店の女の子に、おぼつかない英語で、ビールを頼んだ。

「ギブ・ミー・サンミゲル」
「ノー・サンミゲル。ウィー・ハブ・ベター・ビーア・ザン・サンミゲル」
うまく注ぐと細かい泡がクリーム状になり、口あたりがさっぱりしているフィリピン国産のサンミゲルが好きだったのだが、それは置いてないということで、ヨーロッパの有名な銘柄のビールを持ってきた。ラベルを見ると、作っている所はフィリピンである。
教会や民家の集落がひろがっている谷間をへだてて、向こうの山肌に、数えきれないほど細かな階段が回廊のように刻みこまれているのが、ライス・テラス（棚田）だった。
フィリピンに来たのは二度目で、北部ルソンの山岳地帯のなかにあるライス・テラスが、世界の驚異のひとつとされていることと、このバナウエがそれを見るための国際的に有名な観光地であることを、まえに来たときに岡村は初めて知った。
高さ千数百メートルの山の頂近くまで、無数の階段状に重なっていて、横の長さが数百メートルにも及ぶテラス上の田圃を、より高い山から木の懸樋（かけひ）や溝などによって運ばれてきた水が、上から下へしだいに流れ落ちて、一枚残らずうるおす仕掛けになっている。そこに投じられた労働力の量からすれば、エジプトのピラミッドに肩を並べるとおもわれる壮大で精緻な農耕と灌漑のシステムを、イフガオ族の人たちが近代的な機械や学問によらず、人力と木製の鋤だけでつくり上げたことが、欧米の人にはほとんど信じられないほどの驚異におもわれ、東洋の神秘と感じられるらしい。
日本でいえば耕して天にいたる段段の田畑が、高さにおいても横の長さにおいても比較を絶し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

た規模で、コーディレラ山脈の山襞の随所にひろがっているライス・テラスの起源は、一説によれば、二千年前の昔に溯るといわれている。まえに来たとき岡村は、ライス・テラスを見渡せる場所に、呆然と立ち尽くして、文明論的もしくは哲学的感慨にふけっている様子の若い欧米のヒッピー風旅行者を見かけた。

この日の早朝、マニラを発ってきた長距離バスの乗客の三分の二はフィリピン人で、三分の一はバナウエを目的地とする白人の旅行者であり、岡村のほかに日本人はいなかった。

初めは、ほぼ美人といっていい一人旅の若い白人の女性に、関心を惹かれた。その関心は、じきに脳裡から消えた。食堂と便所のある場所に寄る最初の休憩時間に、彼女がバスから降りる途中、前方の席にすわっていた独身風の欧米の若者を、いかにもさりげなくふり返って見た視線には、ほんの一瞬のあいだに相手を自分の秤にのせて素早く値ぶみし、数百語分の情報を読みとろうとする鋭い気合があった。彼女が旅の道づれに恰好のいいボーイフレンドをもとめているのは確かで、たとえ一時の話相手としても、見ばえのしない日本の中年男など、歯牙にもかけるはずはないと感じられた。また岡村には話相手をつとめられるほどの語学力はなかった。つぎに関心を惹かれたのは、二人連れの若い白人の女性だった。中年の男女をまじえた別の組の旅行者は、ドイツ語で話していた。

「エクスキューズ・ミー……」

レストランに入って来て、二人連れの女と、岡村の間にあったテーブルの椅子を引いた半ズボン姿の初老の旅行者が、彼女たちのほうを向いていった。

ビールのグラスを手にしていた女は、あきらかに形式的な挨拶とわかる作り笑いを浮かべてすぐに消し、とりつく島もない面持を露骨に示して、連れの女と話し続けた。ビールを頼んだ初老の男は、話相手がほしい様子で、夕日に照らされた向こうの山肌のライス・テラスに眼をやりながら、

「アンビリーバブル！」

「ファンタスティック！」

と、白人がいちょうに発する感嘆詞を口にしていたが、赤く日に焼けた猪首をまわして、眼をこちらに向けた。岡村はあわてて視線をそらし、ライス・テラスのほうを見て、わたしは孤独を好む者である……と、哲学的感慨にふける姿勢をとった。

運ばれてきたビールの小瓶とグラスを手にして、立ち上がった初老の男は、表の通りに面した薄暗い土間のテーブルに行き、そこにいた地元の人と話し始めた。そのあとに入って来たドイツ人の三人連れが、そばにすわるとき、二人の女に声をかけて挨拶したが、反応はまえとまったく変わらなかった。

女は二人ともTシャツにジーンズ、ゴム草履をはいて荷物はリュックひとつだけ、という旅慣れた恰好で、ビールを飲んでいるほうは、瘠せて引きしまった体つきをしており、鷹をおもわせる鋭い眼と高い頬骨が印象にのこる男性的な顔だちで、言葉少なだった。

清涼飲料を前にしたほうは、髪をポニーテイルに結び、飴色のふちの眼鏡をかけ、少女のようにあどけなく可愛らしい顔つきをしていたが、首から下が風船のように膨んでいて、ジーンズの

しりが臼をおもわせるほど肥満していた。さきほどから彼女は、自分がいかに男とうまくいかないか、ということを、るると訴える調子で語り続け、瘠せた女は、そんなことはあまり気にする必要はない、あなたの考えすぎだ、と慰めの言葉を繰り返していた。

瘠せた女が姉で、太った女は妹の立場になっていると感じられた。あるいは二人のあいだには、心理的にレズビアンに近い関係が成立しかけていたのかもしれなかった。

耳に入る会話と、視線を動かすときの一瞥で、岡村はそんなふうに観察していたのだが、それが的を射ていたかどうかは、わからない。話す能力にもまして、英語を聞く能力は怪しいかぎりなのだから、耳に入った気がした言葉の断片や、眼に映った印象を、勝手に膨ませた妄想にすぎなかったのかもしれない。

日が山なみに沈みかけて、まわりの空気が黄色っぽくなった。太った女は、ぐちっぽい口調でなおもえんえんと語り続けていた。岡村は店の女の子を呼んで、二本飲んだビールの勘定を聞き、チップをふくめていくらか多めの紙幣を渡して、

「キープ・ザ・チェインジ」

釣りはあげる、とこれだけはかれの怪しい英語でも、聞きかえされることが決してなく、相手の笑顔をひきだすのが確実な言葉を口にして席を立った。

ライス・テラスの展望台になっているレストランから、民宿風のロッジにもどった岡村は、シャワー室へ行き、裸電球の下で、細いパイプから流れ出る一本の水で髪と体を洗った。

フィリピンの四月は、乾季のいちばん暑い時期で、気候のいい観光シーズンのピークをすぎていたから、予約しなくても大丈夫だろうと、高をくくって来たのだが、夜にイフガオ族の民俗舞踊が見られるというバナウエ・ホテルは満室で、おなじバスで来た白人の大半も断られて落胆の色を示していた。

民俗舞踊はディナー・タイムに来れば見られる、と聞いたホテルのフロントの男に紹介されて、岡村はこのロッジに来た。あとからドイツ人の一家もやって来た。

体を洗ったあと、ベッドで少し休んでから、新しいシャツに着替えて、バナウエ・ホテルに出かけた。食堂は白人の宿泊客で混んでいた。食事を終えて上機嫌な表情の日本人の団体旅行客が、親しげな微笑を見せてすれ違った。ウェイターが岡村を空いたテーブルに案内した。

食堂の入口に近いあたりが、ソファーを並べた広間になっていて、ショーの開始を待つ観光客が、おもいおもいの所にすわっており、展望台のレストランで隣あわせた二人連れの女性も、そこにいてコーヒーを飲んでいた。フィリピン・スタイルの夕食を終えた岡村は、バーボンを頼んで、勘定をすませ、

「キープ・ザ・チェインジ」

と、ウェイターの笑顔に軽く頷いて見せてから、ウィスキーのグラスを持って、広間のソファーのほうに移った。

おなじロッジに泊っているドイツ人一家の父親がグラスを手に、岡村を認めて近づいて来た。横にすわったかれに、わたしは日本人で東京から来た、と岡村は片言の英語でいった。ドイツ人

はある地名をいい、そこはオランダとの国境に近い所で、自分はエンジニアであり、休暇をとって一家四人でフィリピン旅行に来たのだ、と英語でいって、

——あなたは何の仕事をしているのか。

と訊ねた。

それは岡村の苦手な質問だった。書く手真似をして、「アイム・ア・ライター」と答えると、きまって、何を書いているのか、と聞きかえされる。このときもそうだった。小説を書いている、とはいいにくかった。調べて書くことが多い岡村は、自分を本物の小説家とはおもっていない。ノンフィクションを書いている、というと、これもたいてい、どういう種類の、と聞かれる。ごく狭い自分の関心の範囲から仕事を始めることが多いかれには、歴史であるとか社会であるとか、相手をすぐに納得させられる大きなジャンルの分け方で答えることも、難しかった。

自分はツーリストで、ここへは見物に来たのだ、といえば、いちばん簡単に話が済むのだけれど、そういって相手を躱してしまうのを、いさぎよしとしない気持があった。ジャーナリストというには、あまりに貧しい語学力の自覚があって、やはりためらいを覚えたのだが、それを押しきり、わたしはジャーナリストである、ということにして、

——ちょっと物を調べに来たのだ。

といった。

——何を調べに来たのか。

ドイツ人は真面目に問いかえした。

難問であった。岡村は、戦争中にイフガオ州の山岳地帯で戦死した兄の最後の模様を確かめるために来ていた。それを正直にいうのが、ウィスキーのグラスを手にしてソファーにすわり、ショーの開始を待っているあいだの話題にふさわしいかどうかは、難しい問題である。

――イフガオ族の踊りとか……。

テーブルや椅子を片づけるウェイター達の動きから、そこが舞台になるとわかった広間の中央のスペースを、なんとなく手の先でかきまわすような真似をしながらそういうと、

――写真は撮らないのか。

と相手は聞いた。岡村は、簡単な仕掛けの小さな安い日本製のカメラを示した。ドイツ人の眼に不信の色が浮かんだ気がした。相手はそれっきり話をやめて、広間の中央に向きをかえ、ショーが始まるのを待つ姿勢になった。

舞台のスペースをかこむソファーや椅子は、色とりどりの服装をした欧米の男女の観光客で埋めつくされていた。前日にでも着いて、もう見てしまったのか、日本人の姿はなかった。岡村は前年に来たとき、イフガオ州の山岳地帯に入る手前の町に泊り、バナウエは通りすぎただけであったので、観光客相手の民俗舞踊を見るのは、初めてだった。

イフガオ族独特の美しい手織りの衣裳を着た少女が現われて、ショーの開始を告げ、これからはじまる踊りの内容を説明した。岡村にはよくわからなかったが、少女の言葉にはウィットやユーモアが籠められているらしく、しきりに笑い声と感嘆の声が起こり、あの子の英語は素晴らしい、という女性の賛辞が聞こえ、解説が終わったときには、盛んな拍手が湧いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.